

旅する進駐軍 ～米軍文書から読み解く占領期のニッポン観光～

American soldier travelling Japan in the Occupation Period:
Focusing on the Case of Aichi Prefecture

梶山女学園大学文化情報学部准教授
阿部純一郎
Junichiro Abe

杉藤重信主任研究員：本年度第2回の人間講座を始めさせていただきます。会に先立ちまして、森棟理事長よりご挨拶申し上げます。

森棟公夫理事長：皆さん、こんにちは。梶山女学園理事長の森棟でございます。令和元年の第2回の人間講座にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。梶山女学園は創立100周年の折に人間学研究センターを設置し、それ以来このような講演会を年に4回行っております。本日は「旅する進駐軍～米軍文書から読み解く占領期のニッポン観光～」というテーマで、阿部先生の研究のお話を伺いたいと思います。阿部先生よろしくお願いいたします。

杉藤重信主任研究員：今日お話していただくのは、先程理事長からお話がありましたように、本学の文化情報学部、阿部純一郎准教授です。「旅する進駐軍」というタイトルがついていますが、今日のトピックは「観光」です。観光は、最近とても重要なトピックとして注目されています。歴史を遡って、観光の意味や現代の観光との違いなど様々なことを指摘して頂けるのではないかと思います。それでは阿部さんよろしくお願いいたします。

阿部純一郎准教授：ただいまご紹介いただきました文化情報学部の阿部と申します。よろ



しくお願いします。

今から70年前、連合国軍に日本が占領されていた時代の観光について米軍の文書を探っていくと、これまで見えていなかったことがいろいろと見えてきました。敗戦後、米軍部隊が最初に上陸した神奈川県や、連合国軍の総司令部が置かれた東京の占領研究は進んでいますが、日本全国に進駐した米兵たちが各地でどんなことをしていたかについては、まだ知られていないのが現状です。今回は占領軍の娯楽やレクリエーションに注目しながら、愛知県に絞って話をしたいと思います。

左の写真は、最近私が調査で訪れたホテルです。どこのホテルかお分かりになりますか（スライド1写真左）。建物はコンクリート造りで、外観は洋風ですが、屋根の部分が和洋

折衷になっています。これは1930年代に日本の建築界で流行した「帝冠様式」というスタイルで、愛知県庁（1938年竣工）や名古屋市役所（1933年竣工）も同じ様式です。1934年に建築されたこのホテルの庭から後ろを振り返ると、三河湾を望む遠浅のビーチが広がり、沖には島も見えます。皆様の中にも訪れたことがある方がいらっしゃると思います。答えは「蒲郡ホテル」です。今は「蒲郡クラシックホテル」と名称を変えています。ホテル内部は外観とは異なりレトロモダンな雰囲気になっていて、アールデコ様式と呼ばれています。調査と言いながらこのようなホテルを訪れ、観光地を巡ることができるのは、観光研究者の特権かもしれません。蒲郡ホテルは貴重な建物で、現在もテレビドラマや映画のロケ地として使われています。



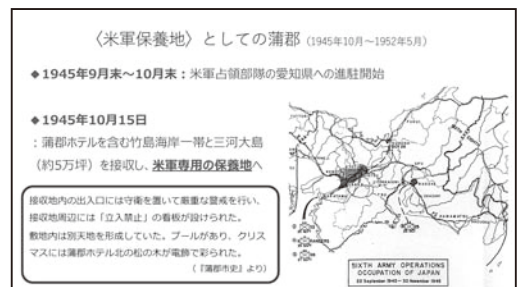
スライド1

右の写真は、70年前に蒲郡ホテルで撮られたものです（スライド1写真右）。軍服を着た男性に注目してください。この男性は日本人ではないように見えます。奥には見送りをしている着物姿の女性が立っており、右手の看板には「SHUWBIDO SOUVENIR DEPT.」と書かれています。看板が英語で書かれていることから、日本人ではなく外国人向けの土産物屋だったようです。現在、この

建物は「六角堂」と呼ばれています。

実は蒲郡ホテルは、1945年から1952年まで米軍の占領部隊に接收され、米兵たちが休暇で訪れるリゾートホテルとして使用されていました。もしかしたら皆さんの中には、蒲郡が米軍の保養地だったという事実を、歴史書やテレビなどで知っている方もいるかもしれません。

まずは、米軍が愛知県にどのように入ってきたかを見ていきましょう。1945年8月30日、連合国軍最高司令官マッカーサーが厚木飛行場（神奈川県）に降り立ち、つづいて東京に司令部を設置します。それから全国各地に進駐していくのですが、愛知県に入るのは神奈川県に上陸してから1ヶ月ぐらい経った後です。これは米軍の文書ですが、どの部隊が何月何日に日本に上陸したかが書かれています（スライド2）。西日本の場合、米軍は9月末に和歌山から上陸して関西方面に部隊を展開し、そのまま京都を占領して司令部を置きます。それと同時に9月26日、一部の部隊が陸路で京都から名古屋に進駐しています。この時は、本隊が入る前に、宿舎や食料を用意したり、鉄道などの交通機関を差し押さえるために200名ぐらいの先遣隊が訪れ、簡単な司令部を名古屋観光ホテルに置きました。



スライド2

た。また、岡崎市や岐阜県にも部隊を展開しています。そして1ヶ月後の10月26日、今度は名古屋港から本隊が2、3万人の規模で上陸し、かつて栄の広小路通にあった大和生命ビル(旧日本徴兵館)に司令部を構えます。神奈川や東京に比べて、愛知の占領は1ヶ月ぐらい遅れたという点をまずは押さえておきたいと思います。

米軍は10月中旬から蒲郡に駐留を開始し、蒲郡ホテルは米兵が休暇を楽しむためのリゾートホテルとして差し押さえられました。この時、蒲郡ホテルだけでなく周囲の旅館や娯楽場、竹島や三河大島など広大なエリアが米軍の保養地として接收されました。元は日本人客が海水浴などを楽しむ場所だったのですが、接收後は日本人も気軽に入れなくなります。当時の写真をみると、接收地の入口には「竹島レストセンター」と書かれたゲートが建てられ、米軍の保養地であることを周囲に示していました。『蒲郡市誌』によれば、「接收地内の出入り口には、守衛を置いて厳重な警戒を行い、接收地周辺には『立入禁止』の看板が設けられた」と記されています。こうして日本人客は蒲郡ホテルを利用できなくなりましたが、蒲郡ホテルで働いていたのは日本の従業員です。従業員の回想録を読むと、戦後の混乱の中で敷地内だけは別天地を形成しており、米兵たちがクリスマスパーティーを行ったりしていたそうです。このような風景が今から70年前の蒲郡に存在したのです。

愛知県の中でなぜ蒲郡が保養地に選ばれたのか、不思議に思われるかもしれません。第1の理由は、戦前の蒲郡は、日本全国の観光地の中でも外国人観光客が訪れる国際的なリゾート地だったからです。竹島海岸は遠浅の

ビーチで、海水浴や潮干狩りに適しており、風光明媚な場所でもあります。ただし、明治の中頃までは日帰りの観光地にとどまっていました。それが滞在型の観光地へと変わるのには、現在のJR蒲郡駅ができてからです。これにより、沿線から多くの海水浴客が蒲郡に訪れるようになり、その客を狙って竹島海岸沿いに多くの旅館が建設されました。

この蒲郡の観光地としての可能性に目をつけたのが、瀧兵(現タキヒヨー)の5代目社長だった瀧信四郎です。タキヒヨーの初代創業者は江南市の呉服商で、のちに名古屋に拠点を移し、繊維問屋として活躍しました。信四郎と蒲郡の観光開発との関係性は年表の通りです(スライド3)。もともと蒲郡には瀧家の別荘があったのですが、広く一般にも蒲郡の魅力を伝えるため、1912(大正元)年に料理旅館「常盤館」を開業しました。昔の写真になりますが、奥に見えるのが蒲郡ホテルで、竹島海岸のすぐ近くに建っているのが料理旅館「常盤館」です(スライド4)。

| 出来事 | | |
|------|------|---|
| 1888 | 明治21 | 東海道線開通にともない蒲郡駅開業 ※広く沿線の海水浴客を集め、海岸沿いに旅館街が形成 |
| 1912 | 大正元 | 名古屋の織物商・瀧信四郎が料理旅館「常盤館」開業 |
| 1931 | 昭和6 | 蒲郡町役場に観光課が新設 ※竹島橋と国際観光ホテルの建設を二大目標に |
| 1932 | 昭和7 | 瀧信四郎、「竹島橋」を建設、蒲郡町へ寄付 |
| 1933 | 昭和8 | 瀧信四郎、大衆娯楽場「共楽館」開業 |
| 1934 | 昭和9 | 蒲郡ホテル(現・蒲郡クラシックホテル)開業 ※鉄道省・国際観光局の「国際観光ホテル」建設資金通制度の適用第1号。瀧兵の寄付金もうけて建設 |
| 1937 | 昭和12 | 瀧信四郎、大衆旅館「竹島館」開業、蒲郡町へ寄付 |
| 1938 | 昭和13 | 瀧信四郎死去(享年72歳) |
| 1944 | 昭和19 | 蒲郡ホテル・常盤館・竹島館・共楽館などを日本陸軍病院として供用、営業停止(7月) |
| 1945 | 昭和20 | 米軍が竹島海岸一帯および三河大島を接收 |
| 1951 | 昭和26 | 三河大島、米軍より接收解除 |
| 1952 | 昭和27 | 講和条約発効を受け、蒲郡ホテル・常盤館・竹島館など全館接收解除 |

スライド3

信四郎は当時の有名な小説家、たとえば菊池寛や川端康成を常盤館に無料で宿泊させ、その見返りに常盤館を小説の題材として取り



スライド4

上げてもらったりしたそうです。現代の企業が有名ブロガーに商品を提供し、口コミを広げていくやり方に似ていますね。そのおかげで常磐館は一躍有名になったそうです。

1930年代は蒲郡だけではなく、国を挙げて国際観光政策が推進された時代でした。今で言うインバウンド政策です。外国人旅行者を増やすため、大蔵省が低金利で資金融通して外国人向けの宿泊施設を作ることになり、国が選定に入ります。いろいろな候補地が挙がるなか、第1号に選ばれたのが蒲郡ホテルでした。

その後も瀧信四郎を中心に、蒲郡の竹島海岸一帯にはカフェやレストラン、土産物屋、卓球やビリヤードなどが楽しめる娯楽場が作られました。また、一般の旅行者向けの宿泊施設として「竹島館」も開業しました。信四郎は蒲郡ホテルの建設資金が足りなければ私財を投じ、竹島と対岸とをつなぐ竹島橋も信四郎が寄贈したのです。

米軍が蒲郡に狙いを定めた理由のひとつは、以上みてきたように、戦前から蒲郡が外国人によく知られた国際的な観光地だったからです。米軍は純粋な日本旅館ではなく、このような外国人向けの設備が整っている場所を意識的に選んだのです。

| 米軍専用の休養ホテル（運輸省観光課編、1948年4月6日） | | |
|-------------------------------|------------|------------------|
| | 所在地 | ホテル名 |
| 栃木県 | 日光町 | 日光金谷ホテル |
| | 日光町（中禅寺湖畔） | 日光観光ホテル |
| | 鬼怒川温泉 | 鬼怒川温泉ホテル |
| | 川治温泉 | 柏屋ホテル |
| 神奈川県 | 横浜賀子（返子） | 返子なぎさホテル |
| | 足柄下郡（宮ノ下） | 富士屋ホテル |
| | 足柄下郡（強羅） | 強羅ホテル |
| | 足柄下郡（仙石原） | 仙石原ゴルフクラブハウス |
| 新潟県 | 中頸城郡（妙高高原） | 赤倉帝国ホテル（赤倉観光ホテル） |
| 石川県 | 石川郡（湯涌温泉） | 白雲楼ホテル |
| 山梨県 | 南都留郡（河口湖） | 富士ビューホテル |
| | 南都留郡（山中湖） | 山中湖ホテル |
| 長野県 | 下高井郡（上林温泉） | 上林ホテル |
| | 下高井郡（志賀高原） | 志賀高原温泉ホテル |
| | 軽井沢町 | 軽井沢万平ホテル |
| | 軽井沢町 | 軽井沢ニューグランドロッジ |
| 静岡県 | 熱海市（伊豆山浜） | 熱海ホテル |
| | 熱海市（伊豆山浜） | 磯口ホテル |
| | 熱海市（伊豆山浜） | 野村別荘（野村ハウス） |
| | 熱海市（伊豆山浜下） | 熱海体育ホテル |
| | 沼津市 | 静浦ホテル |
| 愛知県 | 蒲郡町 | 蒲郡ホテル |
| | 蒲郡町 | 竹島館 |
| 滋賀県 | 大津市 | 琵琶湖ホテル |
| 奈良県 | 奈良市 | 奈良ホテル |
| 佐賀県 | 唐津市 | 唐津シーサイドホテル |
| 長崎県 | 南高来郡（雲仙公園） | 有明ホテル |
| | 南高来郡（雲仙公園） | 雲仙観光ホテル |
| | 南高来郡（雲仙公園） | 九州ホテル |
| 熊本県 | 阿蘇郡 | 阿蘇観光ホテル |

出典：運輸省観光部編（1949）『続日本ホテル略史』より筆者作成。

スライド5

蒲郡と同じように、米軍に接収されたホテルは全国にたくさんあります。接収ホテルは駐留兵の宿舎として使われる場合もありますが、休暇をもらった米兵が休養するためのホテルもあります。その数は1948年時点で計30か所です（スライド5）。場所は日光、河口湖、山中湖、軽井沢、熱海、雲仙など、日本有数の観光地ばかりです。このうち、日光観光ホテル、赤倉帝国（赤倉観光）ホテル、富士ビューホテル、志賀高原温泉ホテル、蒲郡ホテル、琵琶湖ホテル、唐津シーサイドホテル、雲仙観光ホテル、阿蘇観光ホテルの9つが、1930年代の国際観光政策のもとで新たに外国人向けに建設されたものです（スライド6）。

これらの休暇用ホテルは、米軍発行の新聞



スライド6

でも紹介されました。代表的な新聞が『Pacific Stars and Stripes』です(スライド7)。「Stars and Stripes」とは星条旗のことで、日本語では『星条旗新聞』とも呼ばれます。これは主に太平洋地域に駐屯していた米兵向けに配られた新聞で、東京の国会図書館や横浜市の図書館などで一部閲覧できます。ここに挙げた新聞記事では、先程リストアップした奈良ホテルや熱海ホテル、富士ビューホテルなどが紹介され、休暇中に訪れるべき場所として推奨されています。また、ホテル周辺の見所や、ホテルでどんな娯楽が楽しめるのかという情報も載せています。当時、これらの休暇用ホテルは「Leave Hotel」、「Rest Hotel」、「Special Service Hotel」等と呼ばれました。



スライド7

これは奈良ホテルの紹介記事です。奈良の法華堂（三月堂）で仏像を拝観している兵士

や、女性と向き合ってお酒を飲んでいる兵士が映っています(スライド8)。この女性はアメリカ赤十字の方で、ホステスとして休暇用ホテルに派遣され、接待をしています。こうした写真を新聞に載せて、兵士を勧誘していたのです。



スライド8

さらにいえば、接待ホテルの利用者は、日本に駐屯する占領軍だけではなくありませんでした。たとえば朝鮮半島に駐屯していた兵士も日本で一時的に休暇をとり、また朝鮮半島に戻って行きました。蒲郡ホテルの利用者には、グアムからやってきた兵士もいました。つまり占領期の日本観光は、日本国内だけに閉じた動きとして捉えてはいけません。より広く、アジア・太平洋地域に駐屯する米兵たちが日本観光を楽しんでいたのです。

これまで観光をする米軍兵士の問題が、研究の中で正面切って論じられることはありませんでした。占領研究では憲法改正などの政治的な問題が中心で、休暇をとって観光している兵士の話題などは周辺に追いやられてきたのです。しかし私は、日本占領を進める上で、米軍当局は娯楽の問題をきわめて重要視していたと考えています。実際、進駐直後の

10月初頭に、早くもGHQは日本政府に対して、占領軍兵士のためにリゾートホテルやスポーツ競技場を用意し、さらに観光案内も提供するように指令を出しています。

この指令のもとで、日本の観光ホテルが接収されていくのですが、米軍から無理矢理に強制されたものかという点、必ずしもそうではありません。日本の観光業界も戦後の経済復興の手段として、外貨を獲得したいという思惑がありました。どこから外貨を手に入れるかといった時に、お金を落としてくれるのはアメリカ人、特に米軍だったのです。そのため、きちんとした受け入れ体制を作り、観光地に来てもらえるよう接客体制も整えました。日本側で中心になって働いたのは、行政では運輸省です。企業では日本交通公社（現JTB）が精力的に働き、外国語を話せるスタッフを米軍基地や接収ホテルに派遣して、日本の観光地への斡旋業務をしていました。JTBの社史によると、1年間で約12万人の軍人・軍属に旅行案内を行い、約5000人をツアーに連れ出したそうです（スライド9）。かなりの規模になっていたことがわかります。

旅する進駐軍——日本占領史研究の＜空白＞

◆米軍は進駐直後から、日本のリゾートホテルを接収し（米軍保養地）を建設する作戦を指令

↑ 日米連携 ↓

◆日本政府も観光業界は米軍観光を戦後復興の有効な手段として捉え、米兵の受入体制を整備

日本交通公社（現JTB）が斡旋した軍人・軍属数
・旅行案内：11万8000人 ・請負旅行：5400人
（※1946年12月～1947年11月）

※資料は、米国政府の海外旅行案内所（GPO）

但し、日本の政府統計では「米軍観光」の規模は把握困難：「Unaccounted Foreigners」
（米軍人やその家族は法制度上「外国人」から除外）



スライド9

ただし、当時の公的な入国管理統計を見ると、外国人観光客は5万人程度しかいないことになっています。なぜこのようなズレが生

じるのでしょうか？ 現在も同様ですが、これは米軍兵士が日本の出入国管理を免除されており、入国管理統計では「外国人」としてカウントされないからです。しかし実際は占領期にたくさんの米兵が観光していたのです。

蒲郡で休暇を楽しむ米兵の姿は、『Pacific Stars and Stripes』にも掲載されています。これは蒲郡のビーチで遊んでいる写真、乗馬を楽しんでいる写真、そしてクルーズ船に乗っている写真です（スライド10）。記事を意識すると、「海辺で休暇を楽しみたい米兵には、渥美湾をのぞむ上質のホテルとして、蒲郡ホテルと竹島館がお勧め」と書かれています。また、「竹島館が運営するボートを使えば三河大島まで約10分で上陸可能。美しい白い砂浜にはカラフルなビーチパラソルが立ち並び、ビールやコーラも販売している」。さらに、「蒲郡ではビーチ以外にも乗馬、サイクリング、テニス、バレーボールなどが楽しめる。ホテルには軍が派遣したレクリエーション担当の指導員が常駐している」とも書かれています。この指導員は、休暇中の米兵向けにスポーツ大会やゲーム大会を企画する役割を担っていました。他にも、蒲郡からバスで名古屋に向かい、七宝焼きなどの陶器を

＜抄訳＞

・海辺で休暇を楽しみたい兵士には、渥美湾をのぞむ上質のホテルとして、蒲郡ホテルと竹島館がおススメ

・竹島館が運営するボート「Sun Queen」で三河大島に上陸可能。島の美しい白い砂浜にはカラフルなビーチパラソルが立ち並び、ビールやコーラを販売

・ビーチ以外にもヨット、乗馬、サイクリング、テニス、バレーボールなどが楽しめる。

・ホテルには軍のレクリエーション指導員が常駐し、名古屋・岐阜方面への観光ツアーを企画

・竹島館向かいの「共楽館」には映画上映できる劇場、竹島館宿泊者のバーや土産物屋がある



(Pacific Stars and Stripes, FEC Special Service Preview: 1949.9.14)

スライド10

販売するお土産物屋に連れて行ったり、アメリカ本国から取り寄せたドレスや雑貨、生活用品を販売する「PX」に遊びに行くショッピングツアーもありました。また、岐阜で鵜飼を楽しむツアー、お寺を見に行くツアーなどの企画もあったそうです。

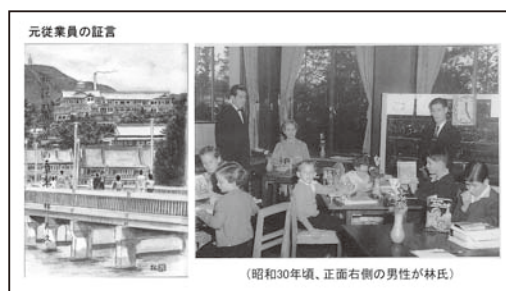
竹島館の向かいに「共楽館」という大衆娯楽場があり、そこで映画を上映することもありました。竹島館内にある宿泊者限定のバーや土産物屋が紹介されている記事もあります。現在、蒲郡クラシックホテルで働いている従業員の方にこの記事を見せると、「今よりグローバルですね」「昔はアメリカのお客様が来て竹島の海岸を楽しんでいたのですね」と驚いていました。

蒲郡ホテルの写真は多く残っています。これはホテルからご提供いただいた写真ですが、「HOTEL GAMAGORI」と書かれた米軍専用のバスです（スライド11）。その周りに米軍兵士と紋付袴姿の支配人、三村三時さんが写っています。写真では背中を向けて顔が見えませんが、元従業員の自伝を読むと、「支配人はいつも紋付袴姿で対応していた」と記されており、これが三村支配人だと分かりま



スライド11

す。この自伝は私家版として出版され一般に流通していないのですが、『私の終戦直前からの五十年』という林義久さんの半生が綴られたものです（スライド12写真左）。林さんは学徒出陣の命をうけて海軍に入隊し、戦後は1949（昭和24）年から蒲郡ホテルで働き始めました（スライド12写真右）。自伝の中に入社当時のホテルの様子が描かれていますので、少し読み上げます（スライド13）。「（ホテルの）坂の下に警備の詰所があり、その奥に向かって左側にずっと真赤な建物が続く。その道の右側手前に竹島館と書かれたグリー



スライド12

【米軍接收時代の蒲郡ホテル～ホテル従業員の回想～】

坂の下に警備の詰所があり、その奥に向かって左側にずっと真赤な建物が続く。その道の右側手前に竹島館と書かれたグリーン色の木造三層建ての建物があり、その様が広場になっていてアメリカ兵がキャッチボールをやっていた。建物の前に星条旗が翻っていて歓声からは日本人が喜ぶ姿が流れ、アメリカ軍の施設の前に来たのだという実感が湧いてくる。

(略)

正面玄関を入ると入口の三階の踊り込みのところで、アメリカ人の可愛い子が三人連でいる。目の前にバツと開けた程ゆいばかりのシャンデリヤを見上げ、広々としたロビー、今迄電気もない暗闇で生活していた目の多かつた私には、まるで夜の国のように目に写った。地下の二世食堂(支配人と二世の支配人の食堂)に案内される。其処は元小活版として使っていたのだろう。小さなカウンターとウスキーの棚があった。間もなく支配人が外れ私についてくるように言われ、二階で一纏にエレベーターを降りると、右側は食堂になっていて賑やかに外人達の笑い声が流れて来る。

(略)

従業員には本国から家庭用品が次々と運び込まれた。それは戦争に敗れてすべてを失った私にとっては、温むべきものばかりであった。中でも冷蔵庫は目を見はる。当時、日本では冷蔵庫は水で冷していた。しかし、届いた冷蔵庫は電気冷蔵庫であり冷凍室もあって二段になっていた。私はなぜ冷凍室で氷が出来るのか当時は不思議でならなかった。又、ラヂオにコードが無いのに音の出るのも何故か判らなかつた。こんな文化国家と戦争をして、日本が勝つわけがなかった。到着された奥様は、これからこのホテルで未知の日本の国で戦勝者として、全身が希望に満ちるように思われた。奥様は色白で顔は小さくて美しいが解は謎のあたりがずんぐりして歩くときと重そうだった。五歳になる女の子は矢張り色白で、眼鏡をかけてラウレリーという名だった。母親をマミー、父親を Daddyと呼んでいた。奥様は一五〇キロ以上はあるであろう巨体を、振り振り着る破れた赤い建物にあるヘッドクォーターに出動して、夕方部屋へ戻られる日課であった。

出典：林義久、1996年、『私の終戦直前からの五十年』（私家版、蒲郡クラシックホテル所蔵）より抜粋。※著者は、同書によると、1949（昭和24）年2月から1980（昭和55）年7月まで蒲郡ホテルに勤務。

スライド13

ン色の木造三階建の建物があり、その横が広場になっていてアメリカ兵がキャッチボールをやっていた。建物の前に星条旗が翻っていて拡声器からは盛んに音楽が流れ、アメリカ軍の施設の前に来たのだという実感が湧いてくる。……（ホテルの）正面玄関を入ると入口の三段の踏み込みのところで、アメリカ人の可愛い子が三人遊んでいる」。当時ホテルでは米兵だけでなく、家族も呼び寄せ、一緒に滞在していたことが分かります。「目の前にパッと開けた眩いばかりのシャンデリアを見上げ、広々としたロビー、今まで電気もない暗闇で生活していた日の多かった私には、まるで伽の国のように目に写った。……隊長室には本国から家庭用品が次々と運び込まれた。それは戦争に敗れすべてを失った私にとっては、羨むべきものばかりであった。中でも冷蔵庫は目を見はる。当時、日本では冷蔵庫は氷で冷していた。しかし、届いた冷蔵庫は電気冷蔵庫であり冷凍室もあって二段になっていた。私はなぜ冷凍室で氷ができるのか当時は不思議でならなかった。又、ラヂオにコードが無いのに音も出るのも何故か判らなかった。こんな文化国家と戦争をして、日本が勝つわけがなかった」。林さんが働き始めた昭和24年当時蒲郡ホテルで繰り広げられていた光景は、本当に豊かで夢のようだったということがわかります。

米兵が遊んでいる写真も残されています。これはビリヤードを楽しんでいる写真です（スライド14）。占領期であることは間違いないですが、正確にいつ撮られたかはわかりません。場所は、蒲郡ホテルの地下1階の松の間です。従業員の方によると、窓の形や天井枠などが今も改修されずに残されているた

め、どこの場所で撮られたか分かるということです。



ビリヤードに興じる米兵たち（年代不詳、場所：蒲郡ホテル地下1階「松の間」）

スライド14

これは米兵たちが食事を楽しんでいる風景です（スライド15写真左）。場所は蒲郡ホテルのメインダイニングルームです。カーテンもフロアランプも当時と変わっておらず、70年間まるで時間が止まったようです。座っている兵士の所属部隊も肩章を見ればわかります。アメリカ陸軍の第8軍の肩章と、第5空軍の肩章が確認できます（スライド15写真右）。このように細かく見ていくと、当時の部隊が蒲郡に滞在し、どれぐらいの階級の兵士が蒲郡ホテルを利用していたかも分かってきます。占領初期にはアメリカ陸軍の第8軍が東日本の占領を担当し、西日本は第6軍が担当しました。その後、第6軍は動員



食事風景（年代不詳、場所：蒲郡ホテル2F食堂）

※肩章から米陸軍第8軍、第5空軍兵士など

スライド15

解除され、所属兵士も1945年末から46年初頭にかけてアメリカ本国に帰国したので、第8軍が日本全国の占領業務を取り仕切ることになります。さらに先述した名古屋市の大和生命ビルには1946年2月から第5空軍の司令部が置かれ、小牧飛行場を拠点に活動していきます。この時期は部隊の変遷が激しく細かくて大変ですが、一つ一つ調べていくしかありません。ただ一つ扉が開くと全部開いたり、何か証言が出てくると全部わかることもあるので、面白い作業でもあります。

米軍の方たちが日本人と会食を楽しんでいる写真もあります。これはクリスマスパーティーの様子です（スライド16）。占領時代には米軍が圧倒的に優位な立場で、日本人は見下されていたと思うかもしれませんが、この写真を見る限り、一緒に食事するなど日米の交流パーティーも催されていたようです。写真中央の料理人は、竹島館の内田料理長です。この方のご息が現在蒲郡で喫茶店をやっているそうなので、今度話を聞いてこようと思っています。そこで当時の写真の年代が確定されてくると面白いなと思っています。



スライド16

これは宴会の様子です（スライド17写真左）。注目したいのは、米軍兵士と日本人との距離です。米軍とそのもとで働く日本人との間には超えられない格差があり、日本人が命令に従っているだけというイメージがついて回ります。ただ、宴会の場ということもありますが、肩を組んで記念撮影しているところから判断すると、少なからず相互の親睦もあったのではないかと思います。



スライド17

これは芸者を呼んで宴会をしている写真です（スライド17写真右）。特徴的なのは海兵が写っていることです。林氏の自伝には、朝鮮戦争の頃に海軍の方たちがよく訪れていたと書かれているので、もしかしたら1950年代に撮られた写真かもしれません。

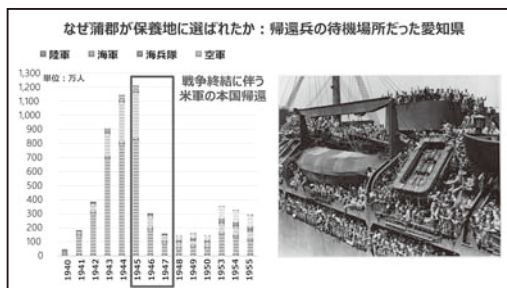
これが現在入手している写真の中で一番鮮明なもので、常盤館の宴会場とされています（スライド18）。文献によると、米兵たちはすき焼きを好んで食べていたようです。面白いことに、とてもうまく箸を使って食べていますね。この写真は『蒲郡市誌』にも載っており、帰国する米兵たちの送迎パーティーの様子とされています。実は蒲郡は、米兵が帰国する船を待つまでの間、娯楽を楽しむ場所でもあったことが最近分かってきました。

このグラフは、国内と海外に駐屯していた



スライド18

アメリカ軍の兵力数を表しています（スライド19左）。1940年から45年にかけて、つまり第二次世界大戦中に兵力数は最大1200万人まで増加し、ヨーロッパで勝利し、さらに日本にも勝利して一気に減少します。これは米兵たちが除隊して本国に帰ったからです。たとえば1945年に約800万人いた陸軍兵士は1947年には100万人、つまり1/8まで減少しています。



スライド19

戦争が終わり、兵士たちはアメリカに帰りたいのですが、帰る船は足りませんでした。これは米兵が帰還船にぎゅうぎゅうに詰め込まれている写真です（スライド19右）。米軍は作戦に面白い名前を付けるのですが、この兵士を本国に帰らせる作戦は「マジックカー

ペット（魔法の絨毯）」作戦と名付けられました。

占領初期には日本軍の武装解除をするため、全国各地に部隊を配置する必要があり、1945年末に占領軍兵士の数は43万人に達します。しかし、その数は翌年から一気に減ります。平和に武装解除が終わり、みんな祖国に帰ったのです。日本人は占領軍に対して、日本を改革してやろうと意気込んで占領しにきたというイメージを抱いていますが、実はそうではなく、兵士たちは戦争が終わり、一刻も早く帰りたかったのです。

早くも1945年9月中旬にマッカーサーは、「日本占領は円滑に進んでいるので、半年以内に占領軍兵力を20万人に減らす」と発言しています。注意したいのは、この時点では、愛知県の占領はまだ始まっていないことです。しかし、早く帰らせないと兵士から不満が上がるので、実際には占領は終わっていないのに、マッカーサーはリップサービスをしたわけです。その後、1947年2月までに計52万人の兵士がアメリカに帰国しました。一方、新たな補充兵も日本に入ってきます。このように出たり入ったりを繰り返しているのが占領の初期なのです。

では、この52万人の兵士たちはどこから帰ったのでしょうか（スライド20）。東日本の場合は、旧日本軍の陸軍士官学校が差し押さえられ、帰還兵と補充兵の待機場所として使われました。この施設は「第4補充処」と呼ばれました。現在もこの場所は「キャンプ座間」という米軍基地であり続けており、在日アメリカ陸軍司令部が置かれています。ここで兵士たちは健康チェックなどを受け、船が来たら横浜港からアメリカへ帰るのです。

一方、西日本の待機場所はどこだったかという、愛知県岡崎市の海軍航空隊基地跡にありました。この航空隊基地は1944年に建設され、1年間使用されただけでしたが、海軍航空隊のパイロットや整備士を養成するための学校でした。この場所が戦後接収されて「第11補充処」と名前を変え、帰還兵たちはここで船を待ち、名古屋港からアメリカへ帰っていったのです。西日本は京都に第6軍司令部があったので、神戸港や呉港を利用しているのかと思いましたが、占領初期はまだ機雷の掃海作業が終わっておらず、名古屋港が利用されました。

◆占領軍の人員交替・兵力縮小：最大43万人（1945年末）→20万（46年）→10万（47年）
：1947年2月までに日本占領部隊から約52万人が帰還

<西日本の場合>
帰還兵の待機施設：第11補充処
（岡崎海軍航空隊基地跡）
+
兵員輸送の拠点：名古屋港
（神戸・呉港の掃海作業が遅れたため）
+
帰還兵の休養センター：蒲郡

東日本各増援兵の待機施設（第4補充処）
（神奈川横浜市中区・旧陸軍士官学校跡）

：戦後、アメリカ本国への帰国がすすむ中で、海外駐留兵士の不満解消と士気向上のため、リゾート休暇、観光ツアー、スポーツ大会などのレクリエーションの充実が図られていく

スライド20

兵士は帰りたい、帰りたいけど船が来ないから帰れない。イライラがたまるわけです。だから蒲郡で遊ばせたのです。800万人いた陸軍が1/8に減り、兵士たちの帰りたい気持ちはどんどん強くなります。戦争が終わるといろいろな不満が上がります。この不満の捌け口をどうするか。放っておけば不満は軍の上層部に向けられます。それを避けるために保養地を差し押さえて遊ばせたのです。そのためのホテルが全国に30カ所あり、その一つが蒲郡でした。観光だけではなく、様々なレクリエーションを米兵に提供するのです。これらの娯楽は占領とは無関係だともうか

しませんが、全くそうではありません。娯楽を与えることが、占領を続けるために必要だったのです。

兵士を遊ばせるために、日本全国のリゾートホテルが接収されたのですが、それ以外にもいろいろな施設が差し押さえられました。スポーツ施設では、横浜公園球場が差し押さえられて、「ルー・ゲーリックスタジアム」と名前を変え、明治神宮球場も差し押さえられて「State Side Park」と名前を変えました。甲子園も差し押さえられました。スポーツ施設以外にも、松竹の劇場などが差し押さえられました。

このように米軍用に接収された施設は全国にどれぐらいあったのでしょうか。そのデータが、第8軍がまとめた占領報告書に載っています（スライド21）。これを見ると1946年9月、占領が始まってから1年ほどで、野球、バスケットボール、バレーボール、トラック競技、ボクシング、ゴルフ、スイミングなどのスポーツ施設が全国で計550カ所も差し押さえられています。それぐらい娯楽を与えることが、米軍にとって重要だったのです。スポーツ施設以外にも、米軍用の劇場は約140カ所、図書館は約130カ所ありました。これが日本の占領の実態です。

第8軍司令部管下の運動競技施設（1946年9月）

| 活動 (Activity) | 施設数 (Installations) | 観客容量 (Spectator Capacity) | 利用人数 (Player) |
|---------------|---------------------|---------------------------|---------------|
| 野球 | 49 | 215,877 | 1,800 |
| ソフトボール | 47 | 87,710 | 1,000 |
| フットボール | 29 | 117,000 | 500 |
| バスケットボール | 40 | 25,650 | 400 |
| バレーボール | 14 | 2,300 | 1,200 |
| ハンドボール | 3 | 3,000 | 50 |
| トラック競技 | 14 | 88,000 | 457 |
| ボクシング | 14 | 19,400 | 10 |
| レスリング | 4 | 2,700 | 4 |
| ゴルフ | 18 | 4,000 | 1,810 |
| テニス | 90 | 13,300 | 400 |
| バドミントン | 36 | 5,500 | 170 |
| ボウリング | 14 | 1,200 | 100 |
| スイミング | 37 | 27,900 | 3,167 |
| その他 | 4 | 400 | 80 |
| 合計 | 712 | 529,000 | 384 |

◆運動競技施設：計553施設
（※第8軍司令部が管理・監督している施設のみ、小規模の部隊がスポーツ用に改良した施設は除く）

ルー・ゲーリックスタジアム（横浜公園球場）

◆他にも、劇場139、図書館128

出典: 第8軍司令部の特別サービスオフィサー、「Historical Record of Special Service in Japan, Nov 45-Oct 48」

スライド21

娯楽と戦争とのつながりについても最後に
見ておきましょう。1950年6月に朝鮮戦争
が始まると、アメリカから軍隊が到着するま
での間、日本に駐留していた占領部隊が朝鮮
半島に派兵されることになります。その時に
も娯楽はとても重要でした。

1950年12月、朝鮮戦争勃発から半年たっ
た頃に「R&R」というプログラムが始まり
ます(スライド22)。「Rest & Recuperation」、
日本語に直せば「休養と回復」です。これは
朝鮮半島で戦い、怪我をしたり、精神的に疲
弊した兵士たちに、日本で一週間程の休暇を
与えて休養させ、ふたたび戦場に向かわせる
という計画です。当初は陸軍兵士を対象に始
まった計画ですが、後に空軍にも拡大し、米
軍以外の国連軍兵士も対象になりました。朝
鮮には遊ぶ場所がないため、一番近場で遊べ
る日本が選ばれました。林氏の自伝にも、「朝
鮮戦争の推移により米兵の出入りも激しく
なった。R&Rと言って戦場から交代で休暇
が与えられ、2、3日滞在して、再び戦場へ
と戻っていった。特に米軍艦艇の横浜入港に
より、休暇の水兵が一度に60人も蒲郡駅の
プラットフォームに降りたときは壮快だっ
た。……その頃は米兵に混じってカナダ、オ
ーストラリア、フランス兵達も見られた」と記

されています。R&R計画は1953年7月の休
戦協定後も続けられ、1958年5月には100万
人目の帰休兵が来日します。1951年の開始
以来、大体7、8年で100万人の兵士が休暇
のために日本と朝鮮を行き来したわけです。
このように兵士に休暇を与えることが、米軍
が戦争を続けるためには不可欠だったのだ
です。

ちなみに、R&Rプログラムはベトナム戦
争でも実施されました。この時は、日本以外
にも香港、タイ、ハワイ、オーストラリアな
ど、アジア・太平洋地域のいろいろな観光地
に米軍保養地が作られました。

占領期の米軍の観光は文化史的にも面白い
のですが、私たちはそれと同時に、観光と戦
争が密接に結びついていたという歴史も理解
する必要があります。

ご清聴ありがとうございました。

付記

本報告はJSPS科研費(18K12953)の助成
を受けたものです。



スライド22